一 帳

服部文庫
イ 17
2140

戸隠山九頭龍大権現

[illegible]

夫海の委細ハ筆ニ

日野大納言殿　清水谷あれの点せ清卿
花とせ八うけ来むかふ拜一とせよ
たまへてもあふくとの千年のこゝろ
春秋殿様
清く添ゆくよろしきのこゝろの清添
清きれかふとそのてつの鶴の栄
千代の枝ろを得きしたる
白つしかえてすめれ
卯の花み色まとりそれ世清し

いろ絵にけあらる鶴ふみし思
老らす竹ゆあのかりの君が代まず
清きぬ鶴つやとの千年の松
海山の角そてもりや竹ともゆかり
りふくしうを千代のさくらの春
梅しの山かの色みく
伝えつし藤をふくかつ世之花
まれるめくむかし卯の古ゆき
春こそ今射明の色の清添之

志賀應保源清源

柳人のかしらんくふく

去や年ねこつる夜のむめにそとほしと

いふくらしもしきけれふしは

鈴姫保清源

船は月さめにくるゝ夜比はるの空

有明の月にほのかしく志ほるゝる

ゆつ春のゆくらしもあるのまか命

また十五夜之月ありしを書

右大將源御かまて

志賀應保源に 清野前に依りふ出候り

かはらのなは

志賀應保源にとゞめし 清源

給くる御教え同し 茶あは

まのれそつゝきる 教はなしそ

教てのめくるも深き かゝ春を海乃

かゝ海の志ら〜 心集にて出し

海山の風そてくれとしかれ 世まし

都よりつゞくよしもなかりし
是より
東越後條鴻邦
明日越之と海にんかつゝき
いく時をしらの葉の照に侍
名おろしやかしく
わり柄の旅の別の情をも厭
ふりれ名残おしい別てくれ
たくち船のをはつゝ留めにと

ちらの君をせむにゆきがよ
船よりけいやくらむのよしみをおふは
ゆめくうつゝをむすぶの別ち
まうき逢ふ名もかまはせ逢みにいらりの北海の
かまくのうをそみ越りかきめ
めぐり逢ふかれの契りの眼かすつ
ゆめもさ人ゑをさ新やるめのきむ
蓮生鴻邦　中之國川吉波猿晩
鴻邦

[illegible]
浦の名の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]まかせて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]和泉式部(?)[illegible]
[illegible]浦の[illegible]
[illegible]
寂蓮法師(?)
[illegible]
[illegible]

定家

見わたせは花も紅葉もなかりけり

浦のとまやの秋の夕くれ

西行法師

心なき身にもあはれはしられけり

しきたつ沢の秋の夕くれ

[illegible]　[illegible]之清見[illegible]

[illegible]のもみちを白川の

[illegible]なれし[illegible]

[illegible]院摂政

月前[illegible]

かまとこし煙ゆすそに[illegible]

なかしくの中に月のさえゆく

[illegible]摂政

十五夜観月

後の月[illegible]

[illegible]秋[illegible]人

小倉山

小倉山ちかき月影に
秋てりまさる秋の夜ふかし

住吉

住吉の松の木の間より
さしのぼる月も気のくもなきと

関白殿へ参

ちとせまでちぎりおきてし菊の露
よゝをへし秋のつゆしとこそ見え

為村卿清遊

たえずたゞ尾上にむかふ人あれと
ゝ結ふふかき契の万代乃春光

子のまつれ

雅君様　蘇姫君様のみまへ
万代乃春をむかえて千世のま
うつゝの友と君がしるしを
おもかた

玉恵

明なりやなかなしつて押丈うみ
こゝろさへ中して明よさすれつは

十六夜　　湾萩

薄ちりは夜の月も美の曇りは月とい
むらさき色にしらし色の青雨をむ

夜長　　松の舎

佐ゆみにもしけれ古乃庭てきけりも
なかしくとしふ眺めそこん

夕寒の擣衣　　つ不か女

いかにて小ミしりなる庭乃花ちりて
うつろやまよふ翁をうれの宿

老　　十歳女

老らくは秋もうしき人耳しきふ
老をいつまてか花なりまん

歳々子梅乃さかりは
白妙のよのかりく

とてもれの清きよりつききて　梅峯
白りみゆきてもつきあまうん

余清須磨の桜の花をおられしを
暮乃あかし
おりなくも手折てミゆるまて花
猶こゝろもちらい何御縁めん
返し　　余清
出ろいきみ入御もちらむ世の中に
ますこゝろ花寄風はるゝやみれ詠を
主人
あかきもしられい
きやく

いさゝか清くいてぬとかして亀山
人のしるあたりのこ風すふ
返し　　主人
秋の田乃りうかの縁の刈あ志子
い稀ともさ清くよ折りのきり里
くろしりくみ乃にらよ
幸あのみとこゝろよ花乃酒ともみ
なかもりけれ人よのとかな
文政十一子年五月廿日

幸龍院様　御年寄

新菖蒲

宿毎に軒のつまなれ菖蒲草
五月の雨や玉とぬくらん

珍姫様

さほきぬる千代の齢はあやめ草
まふかりあをそて軒によるらん

御年寄

幸龍院様

夏螢

暑き日はいつしらし夏ころも
すそのあたり飛かふて螢まつくしれ

溶姫君様

夕涼雨

ここ涼風を袖もてきまふ
かれもとしきさ夕涼雨乃原

珍姫君様

夏草

庭の面に露わけもせてひらく山陰
いろ〳〵さけり大和なでしこ　君寿

新樹

夏きぬと木々の梢もしけりあひて
かくし〳〵露もみつの山は

夏花　　雅信

年毎に池田花井の菖蒲くさ
こやもわかやも軒端まさしてふく

夏恋　　八千代

早苗　　直佑

さ竹のめつ田子の手もとの中にさして
家〳〵し早苗いろのまし〳〵て
色當時苗屋のそひ乃穂多さ

夕顔が棚様

御婦君様にはへあもしけり乃御作多
南ここえ人としめつきぬ西の中の

あくねとられきをほんとくて はなやき
路しはす見まなしうよくすを仕しろ乃
そそもちしほの志をもよれり
時かつおの亦れしく川ゆふてきて
とひ来しみゆりやいろうかつともん
三しやゆめちきほもまころんに
いはりきまたの暮よせいてほし
こうち保のなうきくやきを日ゆきく
かりくりえくくときめいと雨うな

路しく芝ひるきそろまいてよ辛路 おきり
なれもし暮のむしくてろ汁

天神様御歌

百のかうた松のえにしとも染く
らぼくしの君ゆのはよ
さしあそとゆそ さきめ のこい之し
くつれむしせつ照ゆと清

小野小町

あもそうまて芝あらはれあしさら

よしなきかしの嘆かね物かたり

永思抄　屋代太郎弘賢

屋しろ人のおもひ出はへれ

やむまれの本命的殺としみの終もい

中の寛小生とまうされ悟るかくよはし

陰陽道の識わかれ伊とあきてわ

いさゝか物ぬ志の候ず八月廿日

めしよせてまゐらのめあれ

七重間よりしてまのよめやう弘き

めしよりて弘賢かさきの来りし

といふ物をとりて通ふことる別に文あり

象強乃宿に待居し給ひ教しる

後陰陽頭を得へさせむ小吏縫め

かしさひかりて年を給へとさう

かくかゝるほとふかるはり何ぞ講ぜよといへ

尾まの地めなくいとてかたへ道を

われならずの妹はことのなか

樂しきいかむことなしつまりて其の

うしこまちまちゆ御代〻の庭訓ゑ
いはひのしるしまつりそへつる宮にかへて
をも川ゆかゆかしのこたびに結ひくる
やまとの歌よみにきこえて名に高ける
千代のけしき海みちてかよひゆきし
かみの宮乃まつりまつりには
しらすもすゝも伝へきこゆる
すり尾を恵みはらへて清らかに
ましまして、とおもふところの御つき

清道のしるしの文ことかきを家に十七歳よ
なりくれ書きて文のもじれなるもなれて
伝ふるひなるしすゑまて
書割ことよせのたまふりにも宮居する
緑枝さうらんまつのえひさき
しまつかるる結縁す事し
まつかるし御よろしのうえ紫きけれ
あらぬしるしのうるはしのちまで
寛政十二年夏 時しるす

かくれてもつねに広し木の本も

ゆふへる菊にかのさしを出く

能因法師川のあなしまく

稲丸

く々かれ

蕉翁吉野へしいやお茶く行も丸

またしいるる者志く川の堂

十四日川にしらぬ名句

秋風のかくるかひ行ね揺し深

のまくて[illegible]中るかり

木のかきれやさへさかき 揺蝶子

寿徳庵

雨をうけうるふ人のこゝろさ

うらかきくのゝ行へえた九

釋女 四所

あしあ元あとよしぬへり谷さふを

難波のへつふうつ法の道哉

難波の八景 よとはわへつす

田簑夜雨

あめしきる田みのゝしまの夕くれは
名にもかくれぬしくれなりけり

難波秋月

なにはえやしほみちくるよの月かけに
よしあしてらすあきのよの月

天王寺晩鐘

ほのかなるいりあひのかねをきくからに
このよやうきよつくしはてけり

住吉帰帆

すみよしの松ふくかせにすゝむ舟
うらわのしらなみ帆かけ行らし

高津晴嵐

あさなきやはれゆく沖のやまかせに
あしのはしけくかよふ舟人

堂島小野の落雁

ちかきさとなかめよかりし名のみにて
堂島小野のゝつらねての雁

長橋夕照

このあたりの河瀬にうつる夕日の
なかるゝものゝ中に光れる影のうつろ

比良暮雪

ゆふ暮ふりくるしろたへにやまもさとも
ここのみちはせかれぬかよひぢの

いつ八景

常月　　　　　雲丘一添一

あきの夜のおもしろき月にさそはれて
尾上の風のふきすさふ音のみして

紫のたかきをしらす雲ゐの
さとゝしに住しほとりにせきとめ
春のいろをうつすかゝみ
なにしおふてなのもあはれなるかな
文のあやしらぬ二あやきぬの
ながめやるまつかさの松の

いにしへをおもへはあはれさきのよは
むかしあるとき□□にきはしまゐらせ
よろこびてうれしきものをわすれかねて
あしたゆふへのかはらぬおもひ
えんしうの甲斐のくに□□のさと
縁のある君の御事なれは
おもひきるとも花しくらきに
たえていまは年月の恋しみにてる
あきあふときのふたりのなかは

此風は□□□□□□□女郎花
ちからなき身もしはしとまれよ
いとゝ　　西行

法華經方便品の十如是の因
如是縁果報のあはれ
もろもろの本末究竟の如是の
ましてや□の如是の□□
門　如是報の□□

うきぬなみも見えてしてはれぬのまぬか
まくらにの世をしのもしく雨や
なれる舩のなし　石野丹波守廣見

法名如風

ふるさとをあるはてにまたおもひ見れ
ゆきまの雨の草のまくらはしのしく

結ふ草を枕

ふくふる跡しの花をゆきにかへ
風なしにあらしふくとさそふ花

夏の月　橘千蔭
小簾まきしいとふもよのちよしなしいつ
涼しくもこの木かけなる月の影まち月
六月の立萬歳　おなし九
ゆふまかきかの木かけ花の香をまつ
こしまちうつはしめなき有
あなたへゆかしくまつ
この鯉しらし　詞
魚のかみのおもかけしいあらて生るる

もとめのも又ちよにしの行かすもまち
秋木のはな鶴のおとへ入まゐらせて
大磯とゝし
御ためたく紙に候おもひ御ためにまゐらせ候
原もの縁し被の世にて守九

又はるかにおもひ月に隔しまゐらせ
織紙、様せうしおかしく候このことく
おほせられ候の御さし被下候まゐらせ

うち給ひてのふみあるもさし
桜伊勢紀西敷
おもひし所申まゐらせ候のおもきにかしこき
安政御さし印しきのみ大高へ参るの御あれ
八十の為たまはれかの我へ御元酒被のまゐらせ
さしよ御尊ふ又のれたるこはかへしかしく
にてちしのかしやすおもしほとのまゐらせ候
このことによりかたよりふちうきに当れ
あなたよりのうちのしあかしまゐらせ候もんく

かくて茶をたてゝいとまの香法へうつ
しはらくは茫然としておはれたる体なりし
あとより姫君もつきそひ来りし
はやのみかとの御幸にて御しなるにあそはしまう
二十日葉月の二十日よりたちまち
宮中にてもまたゆかりのあかりとなれり
世のうへにあらはれあらはし給ひ
たくひなきあはれとしてのちの世まてのこれり
ありしのゆかりの給ひし紅葉のこゝろ

あなたのしるしのまことをきゝおはしまし一大
事よりかゝるありさまのことにてなしおくれて
御身をなきかひの体をもて姫君の御なけき
いかにもの思ひへ御嬉しきに法のへ仏のみちに
あなたいみしくも探りたまへるに
おもへ君のあはれの給ひし御たのみの御歌紙
ことにゆかしき紅葉の御ことにいとなり
このふみし事
このほとゝせのつゆのことをかしこき道

の行ぬ鬼も然ゝ佐りしらぬとの歌

会亥ふ多ていた九かの庵ぞ

御えとの何方へ行る時

都丘　公乳堂院

いもしろきしく芸をてことしらう

千代のうつり行も見るもやゝ

あの毛色しつふる　一縦策　九霊

はま上り中央の申う　河田川

なまの経の水ふしぬきてくれ行も　鶴林

淵世のさと佐ふしらめ於わかへし　為

名もしはん人のたか江にらう鶴

あともぬれもときしのおもこなし京之そう

空の月を出之忘　明詞

しるとさいしなのよき窓を風の寸

よく中たの都けりのいゆやとふくる年

千載集に法花をしの
おもう　俊成の女
もろともに我や人やあらん
もしりしわれみんなをもとめし
梅のにほひ　淡匝
あをやぎ桜のこしらしら藤本のあさ
まりしう花もしれもさくらの頃
無明長夜　書丸
あなかしこ月いつかとかくしらん

いるゝこゝろの中のみちかきぞうたか
さかぬめのひかりし　誓鬼の闇
流もしましきしりよる露の蝉乃
たぬしもかみにのゆるのかも花か由
鶴とは思ひし合ふそしあさ絵乃
ときのめくぬし　花しさき武部
日みさしくし紺のかさしらる
まわしぬぐらしはくおにしも

夕顔如脩羅御詠 或御夜着の内に立寄給ふとく あり御覧ありて御返しハ去年あり 後の三夜ハうらみ詠みたまふあり

何事もわかれえぬる悔のみち

去ても姫雪な住や雲りのへん

身体命迷ふ所ともすれかふ六道ハ

浮世のみちは是にて残これ

山子世城坊のまことかも人の言は

去り足の揺つ風なり

東柳のみるめし咲花東風の

長閑明る世のすれ待ちら窓

引とうしいさきよより小桃子なる

いつものうらは浪風ハ弱き

厚衾うすねも打さゆる梅す

みちゆく人の春そすゆる

うちとあれハ時節朽ちはそれと

松もひ柳五月雨のれ

咲との花がなき経おづるつ八米と

めぐらさじりくも年なるらく

為とこもの花のたりと風かいよそ芳し

こゝ経にいふことをのをさすさく
これやこの中なる井よりて大ひひの
あらそてゆやまに似たる葉けも蜂
りゆる矢の中にかくの達く大山乃
まきすそ作るも人ていしや
消ぬうき露の色も神も申よ
芦すてすてゐね元まに帰のる
おひぬれ衣は白のすまし事
夫れくちぬる乃のきつらしのを

おかけのか案のいろの色女君
あさとはくもしなかの一とき
大村の槐枝なれまよふしゆも
うくもとの露乃むやられしきこ
何とこしきに家和よ插れ在凡
插しも色しゆるもちろの庭の和
言ゆりき越れ子代の葉とこ
樫も新とす花もし
いりしうた城のつしきこゆま
みとうと子の

うめやよしく御代乃初音かな

浮松

行くら浮ぶよの雪に沿ふて
みえしながらぬまつの本ふりしく
せる地みち焼の井うかゝまし
つゆしたきしやと内かゝりもと
われといふはこひのちる雲
雪のみし千代よからん
いきゆきことは国々の月

分長緑のいろはいく秋
香風

世に此人のむかしのすゝしき秋には
かりつゝ寒しゆく田乃みどり
うきゆもうれしき雨もなびきて
むかしのはるぬ花乃春は

東照宮御神詠

昭かに照らして見る世の中にこそ
雪が降らく年乃くれかな

少将直房

いと稀き年もきみが御代の
めぐりこの里にも春のゆけりの
色そめしなびく人の秋の風
ふかき宮の下草
あふ山もみぢの錦
そら鳥を送るつくしとしよ
新しき年も咲つゞき菊橋
君の雲に浮きめぐみを

河辺を流しはらで
此春の松とちまの菊橋
年くれは西北らしのつくしを
十日夜湖月　中将船
河波や沖ゆく遠方の小舟にて
ゆくしつゝける月ぬけやらさ
閑居暮月
難波江を舟ならびうゑなし
たゞまつらかれぬ月のかゝると

吉田中納言

うらひとつなきもの音をきゝつけて

夜しるこゝろ秋の露のなき

きくひとぞまつみさはよこ雲の

ところまよはぬつまぞこひしき

中納言 秋霜月 容啟

ふりゆく道のとほくにかくる霧も

はるかなる月にまかせて清月夜

内大臣 晴明月

三 曙

秋の路のはるかにきこえて鐘の声

りんりんとすゞしきその月

霜の末の二に誘はるゝ峯の曙

西路て御舟の浦の曙

たちつゞくかゝる所の山桜

西路子 朝の曙

浪の音もうらの浦の子細なり

かつ神の山のまた曙

さとのもの待ちきせしまの山

江上の月と

暗の松風

ましてなかよりるの夜は
秋行よ舟ありてうきいかの
ちよすの宮くをさすふこゝの気和春風
こゝみのられて身をもちなみよ
身ととりきけい深く河ゆへは春い
こゝみよまてこいゝぬのゝ深水を
うて流もうすむ折けまてそ
出るもまわるうともゆのし
池もりしきこ雲の中に

竹風の夜

寒梅

子のうあよいく瀬つりのとむ川
みちうりこゝすこ行うち称の加ん
浮暖雲物
六月雨桶ふとて河分
若のかすりかとうきまてふ汁る
またけよこ植ぬうの初風もん
千乞もことまれのそ川山里よ
ころうやてもまふ春代
里けみ

神さらみさきものなはれたへまきれ
あおはもうよ夕月夜のよ影
うつさる絵姿ぬれ山行雁の影
やさしにからくみはつまるかも
悲しうこの世も川にうつるかも
かくてあまつき ふむくれの一節かへうと
おかさしおれみをとりて立よそうと
難波はふれや このはなぞめ
かはまゝをれや このもれ

二番 うたへ詠
ゆらの葉に住む女のあるまゝさ
かゆゑ はまかつきし去りとく
三番 たんびんくうし
君千世を祝ひくの声のかきていふは
言の葉ことにまくやからん
四番 つまへ詠
わかよゆもつきしあひたる
はるのまさこゝにきみ住まる

入道

あまいたこそ
御こりの[illegible]きなきまれつるは いかまり
人のこゝの葉うかしうたま
あまかつらいうく
このちいせて富ぞ人は子め
こゝは葉ちる葉子よあるせり
家[illegible]にふく篇の[illegible] あれ
ふくてみくるとかふくかをくむ
夜の[illegible]ゆくつれきしつふ何ち

一休

せつま[illegible]あまつゆ[illegible]ん
うく[illegible]はまゝまるゆ[illegible]うゝ
[illegible]ましまよ[illegible]
[illegible]の[illegible]まこちちむる
すくのてゆはゆすふ[illegible]り
あゝふいつ[illegible]のあせ[illegible]
[illegible]ん あくまをこのけ
かまゝもそ[illegible]きてるもれつとさる
まこさるとも[illegible]人のやしき
仏[illegible]の[illegible]きつ[illegible]の[illegible]

人のたづね頭書

後はて行のとこまでの二首

むかしの日のかつ河はあるなれど
仏の御ばせきとめてけせ
此の神ぬきあふれると石
やまいもぬまのこしらる
えもなくきるとめ笠ある川と流れて
紫しくいとうつあふさそ

京都の行年

秋

乾しれ

かみ人のあとつけしめ出る日の
見えぬぬるけの月のに

秋

つくりにしてしぬ老ふ千代の松
こころのこん係乃秋かやらせて

見出

此の色も香は霞の中しくり
よねくこれて旬ふ日

到

松

木乃めやかのあへつうきこゑよ

おゐさき松の緑なりけり
又意
月岩にたらみ半のかへ合心
すみまつまの意の中道
其は古月九九の称井ゟ
ちらちて遊りなゝ　元祖
良と日の粉はさらて際萬り
かりはのまの千代も毎年は
而後三年分序

えつるめしの字の道すてそれ
あかさくの緑好きそこ人のらあ
とつ役まで　にてまのをなりぬ
称しゆりらく　元字
いやちはやれの色はまちくかつる家の　そうよる第一つん
あるそよ学の色の思こゝにうち世々名残もかなし
たとのへし　えつる
あきちふのせきさへ又ことは家の香称ふにつまさく今鏡

ゆりかぬ燕の巣の二つ三つ有に今年はたらち結の子ありて婦さは

折しの君乃めでたしのかしこさよ

子は草つきまた此乃行末　杉尾

杉尾の君が此のつのし　元方子

二わの山尾上にはなてふ杉村いくよも世を経つむ春しらむ

影うつれ皆ちよ代と家の風

めでたき事つむ君の行末　陽子

陽子の君乃盛つ　元雅

たらちねの君とまつてしと家の風はかしのきの夜なよ陽のならむ

孫子に二つ家の二つかたに

みつきことを君なくらん　清子

結子の君のよみて　元つ女

わかなる子をにまく結びの様子ある二つかた

此君の巣ぞへて今は二庭の巣

今代はうつして結ぶみの葉　高子

高子の君のはつし　元河子

孫君の二つ結ぶこと若きのとの二つかたも

今年まり結えて家に由ありて

けふもまた一声北に夢しき　海子

海子の家のうつし　文河子

いく年のたきの糸緑也し称代忘ぬつきたる記

今日としかき色はきへて老平安し

翁乃に脱北しらくに分しき　梅子

梅子の家のうつし　文つ子

老木ハ春ハ支人ころさき梅ハえハ一夜のの雪の後のて花咲ふ

陸子の家の緑く分月ハ菊の遠く春の紋

いつまで句ふ神ても春三絶へ去のる見る家の花　蝶舞

柴舎しの帰路を好てよりの露光

影くのよきさまにてとてあやをよ小松の下記

あふけるとつき信しも春らん春の詳人

よ伊しれ書　文子

秋とてをちめるや豊の秋　妙作

世摘塘の君の書や豊の秋　竹七

三へ正月わに分子の世に蝉生て飛世や

庭乃庭に草木へし　西井久　信定

我にも喜あらん書をもてこよ
此調やれ恐しくれなゐたく書
三江渡の庵みしくらく琵琶を携へて
むかし光明寺の上人ハ見馴れてゆく
西の好とよみけし明宮ハ行まして始さ
むかひてとなる石わてへとよりかへるひ
何役部をしと義孝ハ加へて今古不
数し見識ハさらすして其志を
まこしし一人とよみといふ形勢をもして

なまいとれ甲斐し大にあはされむしろく
志南遊れくつかしくゆきかへの歌とよせ
出るあつしこての気をちかひ為のめり
その根いと意はつし一人とゆそといふ
阿弥の庵かくし果てあかりその那生亨
こくこゝろ連れし翁いの時ハ伊勢屋
めく半嵒に住い松い燧雲のことし
進退過對ちくとたれかめし周旋部宮
こる筆にあたり清き閑言にあつてきも

頼ろゝ笑河内我花ふ咲て目に
孫兒ら詩は賦し歎を吟し文雅の
園に於いハ亦仙境ふ入るもは三子の
嘆ずるきりかりけむつましきことを
称すれハ六云の事あると云ふす
友生傳達方來墨水還波々亂催
筆勢解ㇾ雪花開硯池圓月飾
石見家の三ヶ南山草帰ふとりて
は、白ろふすそうし乃神

玉章山下の東都人識

顴磁石録

湯乃先かゝりきりし香まが賊人こう

冠（かんむり）

天冠

[illegible]

牝牡（ひんが）

[illegible]

雑字

[illegible]

二 格子

[illegible]

茂をひろまで寛に遠道なりきもの如な言ひ銘

自従皇第後和泉古郷寄懐旧
遊旅飛鳥渡緑猿啼独吟去
握三編掉帰石山歎遊漕船
深居聞郭公逢稼汚寺生姓嵐
子種鳶将度亀修洞蠋田川
述懐解雛梓弓帰新子衛何
八宣葎賽風郷厨鶴渡安埋農
草子金須田舎窓習会芳盤
静表去磨鉦闇姑従寿小壹

朧月微雲一似羅

寞叢猿猿鬱摸鋪
紡績細線沙
玉紋跳仕立錦好棒織

茂を 寛に 蛤道 如な 言

自従皇第後和泉古郷毎懐旧
遊依名潟竊撫慰之獨吟蒼悲
擢三論棹舟乃山歎遊漕舡
滝扇岡部之蓮捉沼青出茂底
千種高野藪寵倒潤獨田川
述懐解競梓弓帰紙子衡倚
八重葎軒鳳郷厨場塘安坦濃
菓子魚鱈日舎家鰯舎新鰯鮒
孫義之孫鯉鯛從寿小壺

商市奴乳母娘武士侍醫師禰宜巫女
坊主尼親子婿子和尚遠近寺異見
信意深繁枕竹稽経精進常陰
康高山之薦誌遺作復途後之振舞
黄男寡居下稜怪渇之経周字麻
頬色子餓継之化瓶牙晴眉稜表
摩婆祛根様髻揚髯似龍仍
綿績絶汁刺袖上襟祇幡裏表
定紋誂仕立二歳ト之物好模様識

酈懸山深溪源書

隱樓宕瀆玉亭住巴而乎華之乎
清泉綰之任之擾以為混
猿門比近瓦叔母從牙想願麻
蛇坑壹遮鹿素輛涵波成乾髮妾
毋尊壹化乎懦文嶋藏窒想聽坑
石將松祥吐乳贖扇巾順掉檣府
途蝶岳吧羅力亞鄉鳧子毀印
掃於師格漲文厄乎武詭涼施諺繩
識話哉曾崖厝陳荊該討府旧謝營

酈世人致楊遠砂厥浣探宇順鶴
霓田金信解瀆焚洼元虎沂
檀鐘堂再康施餓影精進相櫳蠟
彩覺提挺厖範肉枕黽庠
丁宮同肩毒疊粡魚龍秋艶抱泡[illegible]
海宮珠格庵衛沉郭孝警格遠背
鰈旌褒焚同情眺筆嵩
鑿姝比目色芸擬榆浦茱蒲葛妃茱棋竹
鋼鮮醉鹹淺流逢不亦敢芽角為

愚人　長　捨　葉

[illegible]

漢　選　篇　廣　賛　難　聯

[illegible]

阿弥陀仏にておはします
切見之の事

芝森本町ニ
丑女 廿四歳
芝森前ニ
播磨氏
丑女
勝藤氏
丑女
丑女
丑女
丑女
洲主
悲母

芝森本町五　丸女　女名申候

芝森本町五

猪狩氏　丸女

猪狩氏　丸女

丸女　丸女

丸女

丸女

洲　生

狩野

の部

風流識雅話意

[illegible]

北郷久道